



埼玉の社叢

入間市愛宕神社社叢ふるさとの森

入間市豊岡三丁目七一三二

愛宕神社が鎮座する界限は、かつては扇町屋と呼ばれ、国道一六号（日光脇往還）と国道四六三号（江戸秩父道）が交わる要衝の地で、今も市の行政・文教・商業の中心部となっている。

当社の元となったのは神明社であったが、正平十三年（一三五八）、当地に布陣していた鎌倉公方足利基氏は、東国の南朝勢力の中心であった新田義興を従者十三人と共に「矢口の渡し」で謀殺し、首実驗の後、当社の社前に葬った。しかしその後、雷火による火災で辺り一帯が延焼したが当社で火が止まった。これを義興の祟りとする風説が起き、正平十六年、基氏はこれを鎮めるために当社に新田大明神を勧請し、扇の形に町を復興して「扇町屋」と名付けたという。

さらに嘉慶二年（一三八八）六月二四日、社地から鳶が多く飛び立ち扇町屋の上を飛び回り、その夜町は大火に見舞われた。この日は愛宕の祭日であることから、二度の大火を免れた当社に、神主が彼の義興所持の別雷命像の描かれた軍扇を神体として愛宕社を勧請して以来、当社は愛宕社として信仰されるようになった。まさに当社の社叢が防火林の役目を果たして社殿を護ったことが信仰に結びついたものといえよう。

当社の社叢（五六アール）は、スギやシラカシの大木があり、社前には今も、「新田義興首塚の松」と従者十三名を祀った「十三塚の杉」が聳える。林相としては主に、スギ・マツ・ヒノキ・ケヤキ等から構成され、市街地の中で貴重な緑となっている。平成七年三月三十一日県の指定を受けた。